

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 乙 第	号
------	-------	---

氏 名 北川 千織

論 文 題 目

Environment and human activities in ancient Egypt-
subsistence and beyond-: with a focus on the analysis of
osteofaunal remains from Qantir, eastern Delta

(古代エジプトの環境と人間の活動- 生活とそれを超えて
-: 東デルタ、カンティール遺跡出土の動物骨の分析を中心と
して)

論文審査担当者

主査	名古屋大学教授	周藤 芳幸
委員	名古屋大学教授	佐々木 重洋
委員	名古屋大学教授	梶原 義実
委員	名古屋大学准教授	新美 倫子
委員	中部大学教授	中野 智章

論文審査の結果の要旨

[本論文の概要]

本論文は、エジプト新王国が西アジア列強と抗争を繰り返していたラムセス朝期にその首都がおかれていたナイル・デルタ東部の遺跡カンティール（古代名ピラメセ）から出土した動物遺存体（骨）を分析対象として、そこから得られた知見を他の遺跡からのデータと比較検討することにより、古代エジプト文明世界における動物と人間との関わりの諸相を明らかにすることを主目的としている。

導入部にあたる第一章は、エジプトにおける動物考古学の研究史を振り返り、その現状と問題点を指摘する。エジプト学の開闢を告げるナポレオンのエジプト遠征とともに始まったエジプトの動物考古学は、膨大な数の動物ミイラに対する人々の関心とともに発展し、1970年代からは集落遺跡の発掘に際して動物遺存体の採取と分析も行われるようになった。しかし、一切の出土遺物のエジプト国外への持ち出しが禁じられていることもあって、これまでの動物考古学の研究は、もっぱら国外の博物館の収蔵品の分析を中心に進められ、組織的な発掘によって遺跡から出土しコンテクストを確認することのできる資料の研究は十分に進んでいない。

このような状況に対して、第二章で論者は、1980年から2004年までにカンティールの四つの発掘区から出土した総計14029点に及ぶ動物遺存体を詳細に分析する。これらは貝類、魚類、爬虫類、鳥類、哺乳類に大別された上で、それぞれについて細かな種の同定と資料の点数、その生育環境、季節性が明らかにされる。いずれの発掘区においても圧倒的に大きな割合を占めているのは哺乳類の動物骨であるが、これについてはウシ、ヤギ、ヒツジ、ブタ、ウマ、ロバ、ラバ、イヌ、ネコごとに形態や年齢についての詳細な分析と考察が加えられており、ウシやヒツジ、ブタなどの食肉用と考えられる家畜については成獣に達して肉が硬化する前に屠殺されていたらしいこと、ウマについては王室の戦車を牽引するために大型の成体が選別されたらしいことなど、興味深い解釈が提示されている。

第三章では、カンティールからの知見を相対化するために、これをエジプト各地の遺跡からのデータと比較検討することで、先史時代から王朝時代にかけてのエジプトにおける動物利用のあり方の地域差と通時的変遷が詳細に吟味される。カンティールの顕著な特徴は、家畜動物骨の約半数をウシの骨が占めていることであるが、隣接するヒクソス支配時代の首都テル・エル・ダバでも王朝時代には時代が新しくなるに連れてウシの割合が増加する傾向が見られ、これらの拠点的な都市住民の生業が、周辺環境に適応する形でウシなどの家畜の飼育に依存していたこと、その周辺環境については野生動物や魚類、鳥類などの遺存体からの復元が可能であることが指摘される。

結論にあたる第四章では、前章までの分析成果を総合し、これまで文字史料や図像史料などから進められてきた古代エジプトにおける人と動物との関わりの解明にあたり、現在導入されつつあるDNA分析などの新たな手法も応用することで、動物遺存体の研究が将来さらに大きな貢献を果たしうることが主張されている。

論文審査の結果の要旨

[本論文の評価]

古代エジプト文明世界については、その精神文化に関わる大規模な建築遺構や精巧な遺物などへの関心の高さとは裏腹に、これを担った人々の日常を支えていた生業に関する考古学的な研究が立ち後れていることは周知の通りである。これに対して、日本で動物考古学を学んだ後に渡独した論者は、カンティールやアシュートにおけるドイツ隊のプロジェクトに長年にわたって参加することで関係者からの信頼を集め、本論文ではカンティールから出土した動物遺存体を網羅的に分析し、それを他遺跡からのデータと詳細に比較検討することで、王朝時代のエジプトの生業に占めていた動物の役割を多角的かつ総合的に解明することに成功している。すでに論者は、副論文として提出されている単著 (*The Tomb of the Dogs at Asyut: Faunal Remains and Other Selected Objects*, Harrassowitz 2016) においてエジプト動物考古学者としての地位を国際的にも確立しているが、本論文においては、エジプトのもっとも重要な宮殿遺跡の一つであるカンティールから出土した動物遺存体を自らの手によって分析し、その結果を平明で正確な英語と膨大かつ詳細な図やグラフによって提示することで、カンティールにおいて各種の家畜と野生動物が生業に占めていた役割（特にウシへの依存度の高さ）、さらに動物利用に関する様々な興味深い特徴を明らかにしている。近年、動物考古学においては種ごとの専門化の傾向が顕著であるが、エジプトのように原則として出土資料を国外に持ち出して分析することの不可能な国では、論者のように幅広く哺乳類から鳥類や魚類にいたる様々な種の同定を現場で行うことのできる能力はきわめて貴重である。本論文も、まさに論者のそのような能力の賜に他ならず、学界への貢献はきわめて大きいと考えられる。

一方で、論者による膨大なデータの解釈をめぐっては、異論の余地がないわけではない。たとえば、カンティール（及び他のデルタの遺跡）から出土するウシの骨は、この地のウシが上エジプトのものと比べて体格が大きかったことを示しているが、その原因を論者は下エジプトの恵まれた環境条件に帰している。しかし、このような地域差は系統の違いを反映している可能性もあり、論者の推論は必ずしも説得的ではない。また、論者はウシ、ヒツジ、ヤギ、ブタの利用について、それらの多くが成獣に達する前に屠殺されていることから、とりわけウシについて柔らかな牛肉がカンティールの住民に好まれていたと推測しているが、南スーダンなどの民族例に照らすならば、食糧源としてのウシの利用で重視されているのは圧倒的に乳製品であり、食肉については儀礼との関係などがさらに検討される必要がある。カンティールの首都としての特性やそこで顕著に見られる西アジアとの文化交流の影響についても、さらに立ち入った検討が必要であろう。しかし、これらの問題点は、すでに論者が着手している古代 DNA 分析などによってその解明が期待されるものであり、本論文の価値を損なうものではない。

以上の理由により、審査委員は一致して、北川千織氏の学位請求論文が、博士（歴史学）の学位に相応しいものであると判断した。